



Title	台湾先住民におけるビンロウ(檳榔)利用文化の比較研究
Author(s)	
Citation	令和7(2025)年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書. 2026
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104703
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和7年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	はやし あゆき 林 歩紀	学部 学科	文学部人文学科	学年	2年
ふりがな 共同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	さとう れんや 佐藤 廉也	所属	人文学研究科		
研究課題名	台湾先住民におけるビンロウ(檳榔)利用文化の比較研究				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽竊にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				
<p>I.はじめに</p> <p>1.研究背景</p> <p>台湾の先住民である原住民¹に関する研究は、日本統治時代から現在に至るまでさまざまなアクターによって活発に行われてきた。近年では現地の博物館に従事する原住民の人々による当事者視点での研究²も盛んに行われている。</p> <p>原住民研究において、物質文化に関する研究は文献等では捉えきれない生活の側面を可視化できるために重視されている。戦前は伊能らによって執筆された『蕃族調査報告書』をはじめとして政府主導で書かれた報告書で物質文化に関しても幅広く記述され、戦後はそれまで原住民研究を行ってきた日本人に加え、台湾に居住する漢民族、近年では先述したように原住民自身など複数のアクターによって引き続き研究がなされている。</p> <p>今日の台湾では16の民族に分類されるとされている原住民のなかでも、文化や社会構成に類似性を持ち、台湾南部に居住するパイワン族およびルカイ族³においても物質文化研究は多様な対象を通して行われている。例えば、紙村(1996)では両民族の首長家で伝承される三種の神器の持つ意義や伝承状況に関する調査を行い、角南(2009)では両民族の伝統的な蕃刀に類似点多くみられることを指摘している。</p> <p>このように原住民、その中のパイワン族、ルカイ族に対してもさまざまな物質を通じたアプローチがなされているが、それらの既存研究の多くが神器や蕃刀といった首長層に関連した物質が対象とされてきた。その一方で、平民層に関連した、あるいは身分差なく民族内で横断的に利用されている物質を取り扱った研究は、現状では比較的少ない。しかし、各民族内で、多様な用途で、かつ多くの人々に利用されている物質に焦点を当てて研究を行うことは対象の民族の生活実態を理解するうえで重要であると考えられる。</p>					



写真1/檳榔を栽培している農園(台湾,屏東県枋寮郷)

このような自身の考えから、本研究ではパイワン族とルカイ族における檳榔を利用した生活文化の調査および文化に類似性を持つ両民族間での比較を行った。



写真2/檳榔を嗜好品として販売する店(高雄市前金区)

本研究の対象である檳榔(ピンロウ,英;betel palm)は台湾では噛みタバコとして広く用いられているヤシ科の植物である。また、特に台湾南部に居住する原住民の生活場面において、檳榔は単なる嗜好品としての利用を超えた幅広い用途で用いられていることが角南(2009)においても報告されている。パイワン族・ルカイ族においてもその傾向は同様であり、『蕃族調査報告書』や『蕃族慣習調査報告書』などの戦前の文献から、身分差なく利用されてきたことが確認できる。このような背景から檳榔は身分差なく利用されている物質に関する両民族間での比較研究である本研究の格好の題材であると考えた。

本報告書では以下の構成で論述する。まず次章でパイワン族とルカイ族の社会および文化における類似性を、主に先行研究から整理する。その後、両民族の檳榔の利用方法について、現地調査で明らかになったことを中心に紹介する。最後に両民族間の類似点・相違点に関して整理し、考察を行い、現時点での結論へと至る。

2.現地調査日程

本研究ではパイワン族、ルカイ族における檳榔の利用方法に関して明らかにする一環として現地調査を、2025年11月13日(木)から同年11月19日(水)の間に実施した。現地調査では主に両民族の集落および集落内の資料館の訪問・聞き取り調査を行い、調査最終日には台北市内の博物館を訪れた。行程は以下の表の通りである。

日時	主な活動場所	活動内容
2025年11月13日(木)	台湾,高雄市	午後に台湾に入国
11月14日(金)	屏東県来義郷	パイワン族の集落(5集落)・資料館見学 現地での住民への聞き取り調査
11月15日(土)	屏東県霧台郷	ルカイ族の集落(2集落)・資料館見学 現地での住民への聞き取り調査
11月16日(日)	屏東県霧台郷、三地門郷	ルカイ族の住民への聞き取り調査 パイワン族の集落(1集落)を訪問
11月17日(月)	高雄市、台北市	移動、聞き取り調査の内容整理
11月18日(火)	台北市	順益台湾原住民博物館見学
11月19日(水)	桃園市	早朝に台湾を出国

II. パイワン族とルカイ族における社会・文化の類似性

パイワン族とルカイ族は両民族間のさまざまな面で共通点を持っている。こうした共通点の多さから、日本統治時代には現在のルカイ族がパイワン族と同一の民族であると考えられていた時期もあり、現在の分類が適用されるようになったのは、馬淵東一らによって1935年に『台湾高砂族系統所属の研究』が刊行され、台湾総督府に馬淵らの民族分類が認定された後のこと⁴である。本章ではこのようにパイワン族とルカイ族の間での民族分類の変更をもたらしてきた要因の一つである、両民族の社会および文化における共通点について整理する。

1. 社会面における共通点

パイワン族とルカイ族の伝統的社会における共通点として頻りに挙げられるのが、笠原(1999)をはじめとしてさまざまな文献で指摘されている階層制社会の存在である。両民族は、支配層である首長層と被支配層である平民層によって構成されている。また、いずれの民族においても首長が世襲によって継承される点も共通している。このような首長制は、両民族以外では、台湾においてはプユマ族でしか見られない。

さらにこの首長制は、集落の合併や首長家の権力分裂などの要因により、首長が複数存在する集落がみられる点も共通している。実際に、現地調査で訪れたルカイ族の霧台集落は、首長が2名いる集落であった。

ただし、首長の世襲制度には両民族間で違いがみられる。パイワン族では性別に関係なく長子が優先される⁵のに対し、ルカイ族では長男が優先される点で制度が異なる。

制度的側面以外にも、首長が特権を有する点に類似性がみられる。主な特権としては、家屋装飾に使用できる特定の文様の独占、刺青に用いる模様の特権、平民層から税として収穫物を徴収する権利などが挙げられる。

このように、パイワン族とルカイ族はいずれも階層性社会を特徴として共有している。一方で、こうした伝統的な階層社会は近代に入り、議員など他の集落代表者の登場によって弱まりつつあることが尤(2023)によって指摘されている。この点については、現地調査でパイワン族集落を訪れた際にも、かつては存在したとされている税の特権が現代では存在しないという説明を住民から得ており、実際

に確認できた。

2.文化面における共通点

首長制度をはじめとした両民族の社会面と同様に、文化の側面においてもさまざまな面でルカイ族とパイワン族の同質性を見出すことができる。その中でも代表的な例として挙げられるのが石板家屋である。石板家屋は、伝統的なパイワン族およびルカイ族の住居であり、平らな石を積み重ねて建築される平屋建ての住居である。しかし現存する石板家屋は少ない。パイワン族の住民によると、これは戦後、中華民国政府によって両民族の住民が山間部から平地へ移住させられ、その時から漢式住居に住み始めるようになったことが要因であるという。一方で現在でも観光施設や公共施設などで石板家屋の壁面を模したデザインを取り入れているものや、少数ではあるが復元された石板住居が存在する。このように現代において、石板家屋は両民族の文化的アイデンティティを象徴する重要な役割を果たしていると考えられる。



写真 3/復元された石板住居(屏東県霧台郷)

石板住居と同様に、両民族の文化的共通点として挙げられるのが、百歩蛇や太陽、壺などを用いた装飾である。これらの装飾は、各民族に受け継がれている始祖伝承や、かつて信仰されていた精霊信仰をモチーフとしている。

これらの装飾は、先述したように、本来は両民族において首長のみが使用を許される特権であり、首長家以外が用いることは制限されていた。しかし、現在では集落全体で共有されるようになり、石板家屋と同様に、パイワン族およびルカイ族のアイデンティティを示す象徴として機能していると考えられる。



写真 4/ルカイ族の独自の装飾が取り入れられた資料館

これらのほかに、両民族の各集落で首長に受け継がれる神器についても多くの共通点がみられる。この点については紙村（1996）が詳細に検討しており、両民族が土壺、青銅製の短剣、蜻蛉玉の三種を神器としていることが一致すると指摘している。また、土壺が祭祀、短剣が軍事、蜻蛉玉が豊穡や子孫繁栄を象徴すると考えられている点においても共通する。さらに紙村は、こうした背景から、両民族の伝承において相互の「乗り入れ」が頻繁に生じている可能性を指摘している。

以上のように、パイワン族とルカイ族は、階層性社会、住居、装飾、神器などさまざまな領域において、また首長層および平民層それぞれの文化においても共通点を有していることがわかる。

こうした両民族の社会・文化の同質性をフェレル(1969)では「ルカイ文化複合」と、笠原(1997)では「ルカイーパイワン問題」といった用語を用いて説明することがある。本研究の主題であるパイワン族とルカイ族の檳榔利用文化の比較も、これらの文脈に位置づけられるものであると言える。

III.パイワン族における檳榔の利用方法

現地調査を中心とした調査の結果、確認できたパイワン族における檳榔の利用方法は、「嗜好品としての利用」、「伝統儀式での利用」、「結婚・縁談での利用」、「おもてなしの品としての利用」、「境界線としての利用」の五つに大別できる。本章では、それぞれの利用方法について整理する。

嗜好品としての利用

台湾全土における檳榔の一般的な利用方法である噛みタバコとしての利用はパイワン族の集落でも確認できた。実際に調査で訪れた各集落でも檳榔を販売する店がみられた。しかしその一方で、「昔から習慣のある高齢者は檳榔を食べる人が多いが、若年層はあまり食べない」という証言が得られた。

また、パイワン族の人々は檳榔をそのまま食べるという証言も得られた。これは、台湾で一般的に用いられているキンマ(コショウ科の植物,英:betel pepper)の葉と石灰と共に食べるという方法とは異なる。

伝統儀式での利用

パイワン族の伝統儀式において、檳榔は主に祖霊祭と収穫祭の二つの儀式で利用されていることが明らかになった。祖霊祭とは、パイワン族の一部集落⁶において伝承されている、部落の豊作や平和を祖先の霊に祈る儀式で、5年に一度、5日間かけて行われる。自身の体内に入るものや身につけるものを供物して捧げる祖霊祭において、檳榔も祖先への供物として扱われる。しかしこれは全世帯共通の習慣ではなく、檳榔を日常的に利用する家庭のみの習慣であるという。



写真 5/先祖へ供物を捧げる様子を表した壁画(屏東県来義郷)

収穫祭では、収穫された農産物の一部を首長に献上する風習があり、檳榔もその中の一つの品目として登場する。しかし先述したように、議会議員などの他の権力者の登場によって首長の集落内での権力が低下したことで、このような風習は衰退傾向にあるという意見もパイワン族の集落内でみられた。

また、これらの儀式で用いられる檳榔は、収穫されたばかりの新鮮なものが望ましいとされ、そのような新鮮な檳榔が優先されて利用されている。

なお、上記の内容は全てパイワン族の集落である屏東県来義郷での聞き取り調査を中心とした現地調査で得られた結果である。

結婚・縁談での利用

檳榔は、パイワン族において結婚や恋愛においても重要な意味合いと役割を持つ。檳榔はバナナのように房状に実るが、幹と接合する房の芯の部分は輪状の形状をしている。パイワン族では、この輪状の部分が婚約などによって結ばれた良縁を象徴すると考えられており、廃棄されずに保存されることが多い。この用法を紹介してくれた住民は、「離婚や夫婦喧嘩の多いパイワン族ならではの風習であり、夫婦の間で良い関係が続くようにという願いが込められている」と話してくれた。

また、パイワン族において檳榔は伝統的な結婚式における婚資としても機能しており、このことは山元(2017)でも指摘されていた。また聞き取り調査では、檳榔は婚資として必須であるという意見も確認され、他の婚資品目と比べてもその重要度が高いことがうかがえた。

おもてなしの品としての利用

パイワン族では、来客時におもてなしの品として檳榔を用意する習慣があるという意見が得られた。来客に対する好意を示す際に檳榔を用いる習慣は、台湾におけるマジョリティである漢族には見られず、多くの他の原住民族でも確認されていない。そのため、これはパイワン族に特有の文化であると言える。しかし、先述したように、近年ではパイワン族の若年層は檳榔を利用しない傾向にあり、この習慣も衰退しつつあるという意見も集落の住民から得られた。

境界線としての利用

聞き取り調査の中で、檳榔の樹木を隣家との境界線上に植えることがあるという証言が得られた。今回訪問した集落は漢族式の住居が立ち並び、中華民国政府による移住政策によって形成された集落であったため、この利用方法の実例を確認することはできなかった。したがって、この証言は訪問しなかった他の集落や、過去の利用方法であると推察される。

小括

以上のように現地調査を通して、パイワン族における檳榔は、単なる嗜好品にとどまらず、民族独自の利用方法や、特に恋愛面で特別な意味合いを持つことが明らかになった。しかしその一方で、現代では若年層を中心に檳榔の利用が減少していることから、かつて一般的であった利用方法の一部は衰退傾向にあると判断できる。今後は、この独自の文化が消失してしまう可能性も危惧される。

IV.ルカイ族における檳榔の利用方法

パイワン族の際と同様に、ルカイ族に関しても集落での現地調査を中心に調査を実施した。確認された檳榔の利用方法を分類すると、パイワン族と同じように、「嗜好品としての利用」、「伝統儀式での利用」、「結婚・縁談での利用」、「おもてなしの品(贈答品)としての利用」、「境界線としての利用」の5つに主に分類できる。以下ではそれぞれの利用方法について整理する。



写真 6/ルカイ族の住民が檳榔を調理している様子(屏東県霧台郷)

嗜好品としての利用

ルカイ族においても檳榔は嗜みタバコとして日常的に消費されている。ルカイ族の複数の住民によると、ルカイ族では老若男女問わずに檳榔を食べ、この点は主として高齢者層が食すパイワン族とは異なる。一方でパイワン族と同様に政府の政策的介入⁷により過去と比較すると食べる人は減少しているという。

また、石灰を塗布しキンマの葉で包んで食べるという台湾における一般的な方法はルカイ族では主流ではなく、生の実をそのまま食べるという証言が得られた。この点もパイワン族と一致する。

さらに、現在は檳榔を商店で購入するのが一般的であるが、集落が政府政策により移転させられる以前は自給していたという証言もあり、証言から 1960 年代に生じたとされる自給的農業から商用作物中心への転換と関連して変容したことが推察される。

伝統儀式での利用

集落での聞き取り調査により、ルカイ族の伝統儀式では、檳榔は「兄弟・姉妹の儀式」と「収穫祭」の二つの儀式で利用されていることが分かった。まず、「兄弟・姉妹の儀式（ルカイ語：*matatwalali*）」は、血縁ではなく、親しい青年同士が兄弟・姉妹の関係を結ぶ際に行われる儀式であり、檳榔は儀礼上の必須の贈り物として交換される。

次に、収穫祭はルカイ族の正月にあたる 8 月 15 日に行われる重要な祭儀であり、パイワン族と同様に、檳榔は収穫物の一つとして首長へ納められる。

結婚・縁談での利用

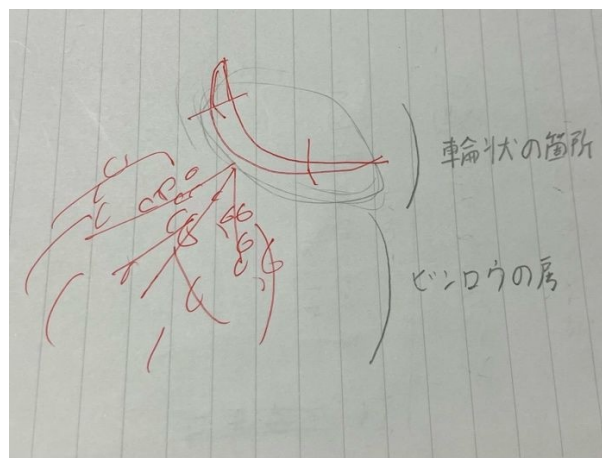


図 1/ルカイ族の住民による檳榔の房の図(住民作成、筆者加筆)

パイワン族同様、ルカイ族においても幹と接合する輪状の箇所は特別な意味を持つが、その意味はパイワン族とは異なる。ルカイ族において、この輪状の箇所は「女性の誠実さ」を象徴するものであると考えられており、この他に健康祈願の際にも用いられている。また、ルカイ族では檳榔の実そのものも誠実性を象徴すると考えられており、この点でもパイワン族と異なる。こうした象徴性から、檳榔は婚約にふさわしい品と考えられ、伝統的な結婚式において必須の婚資とされる。

この点については尤(2023)でも指摘されており、女性の家に女性への好意を伝える際と結婚式の際の二度にわたり用いられることが述べられている。また、貴族層と平民層とで結婚式の行程には差異が生じるが、いずれも檳榔は必須の婚資として扱われている。

また、ルカイ族では元来、交際前の男女が 2 人きりになることが禁じられており、交際を申し込むには双方の友人が複数人立ち合いのもと交際を申し込む儀式を執り行う必要があったという住民からの証言があった。この儀式はルカイ語で“pasuvalima”と呼ばれ、その際にも檳榔は必須のプレゼントとして登場する。しかし、近年ではこの儀式は行われなくなっているとの証言もあり、過去の慣習であることがうかがえる。

おもてなしの品(贈答品)としての利用

ルカイ族においても、来客時に檳榔を振る舞う慣習が見られることが現地での調査で明らかになった。この点ではパイワン族と同様であるが、ルカイ族では特に贈答品としての性格が強いと感じられた。日常的な来客に加え、ルカイ族では葬儀などの場でも来客に檳榔が振る舞われる。ある住民の女

性は、「日本人が客にお茶を出すのと同じような感覚で、我々も檳榔を振る舞う」と述べており、檳榔は一般的なおもてなしの品として位置づけられていることが推察される。

贈答品としての側面が強いと述べた背景には、住民の証言により明らかになったことであるが、習慣としてルカイ族では出産時に檳榔を贈ることが挙げられる。これには先述したように檳榔に健康祈願の意味合いが込められていることが関連していると考えられる。

境界線としての利用

ルカイ族においても、パイワン族と同様に檳榔樹が隣家との境界線として植えられる事例が確認された。聞き取り調査に応じてくれた住民は「収穫した檳榔は来客時に用いる」と述べており、商用ではなく自家消費に栽培されていることがわかる。

小括

以上のように、ルカイ族における檳榔は、嗜好品にとどまらず、民族固有の象徴性を備えながら、かつ多様な場面で利用されていることが明らかとなった。一方で、パイワン族と同様、ルカイ族でも檳榔を食す者は減少しているとの指摘がルカイ族の住民から挙げられた。檳榔を食べないという住民にその理由を質問したところ、檳榔を食べることで口内が赤く染まることを嫌う者や健康意識の向上で発がん性物質である檳榔を食べることを控える人が増えたことが背景にあるという返答があった。このことに関連して、パイワン族と同様に今後檳榔に関連した習慣の消失が懸念される。

V. 考察

本章では、前章までの議論を基に、パイワン族とルカイ族における檳榔利用文化の共通点および相違点を整理し、両民族においてこれらの差異が生じた背景について考察する。

1. パイワン族とルカイ族における檳榔の利用文化の比較

第3章および第4章で述べたように、パイワン族とルカイ族の檳榔利用には、分類した各領域において多くの共通性が確認された。全体として、利用目的の分類レベルでは両民族間で大枠が共通するものの、具体的な利用の実態や背景に付与された象徴的意味には相違がみられる。

はじめに、一般的な檳榔の利用方法である嗜好品としての利用は両民族で共通する。両者とも生の実をそのまま食する点、また過去に比べ常用者が減少している点も一致していた。一方で、パイワン族では檳榔を食べる層が主に高齢者層であるという証言が得られたのに対し、ルカイ族では性別や年齢に関わらず幅広い層で食べられているという点で違いが見られた。

次に、伝統儀礼での利用を見ると、パイワン族では祖霊祭と収穫祭、ルカイ族では兄弟・姉妹の儀式および収穫祭において檳榔が用いられていた。儀礼そのものの内容は民族間で異なるため単純な比較はできないが、いずれにおいても檳榔が儀礼上の贈与物として機能している点は共通している。

さらに、結婚・縁談における利用では、両民族とも檳榔が婚資として重要な位置を占めていた。住民の証言からも、檳榔が伝統的な結婚式において必須の婚資と認識されていることが確認できる。ただし、婚資として用いられていることの背景にあると考えられる、檳榔の象徴的意味には差異が

ある。パイワン族では房の芯の部分が良縁を象徴するのに対し、ルカイ族では同箇所が女性の誠実さや健康祈願を象徴し、さらに檳榔の実自体も誠実さの象徴とされていた。

また、おもてなし・贈答品としての利用も両民族に共通するが、その利用範囲はルカイ族の方が広いと考えることができる。パイワン族と同様に日常的な来客時に振る舞われるほか、葬式などの臨時の来客時や出産時などにも用いられる。

最後に、檳榔の樹木に関してもパイワン族とルカイ族の両方で独自の文化利用が確認できた。檳榔樹は隣家との境界線として両民族の間で共通して利用されており、そこで収穫された檳榔は来客時等に用いる自家消費用として利用されていた。

以上のように、パイワン族とルカイ族の檳榔の利用文化にはさまざまな面で共通点が見られるという結果になった。一方で、用途が同じ場合でもその用途の背景が異なる利用方法(噛みタバコとしての利用層の差など)や檳榔が象徴する意味合いの差などの、細部において複数の相違点が存在することが判明した。次節では、これら共通点および相違点を生じさせている背景を考察する。

2.パイワン族とルカイ族における檳榔の利用文化の考察

パイワン族とルカイ族にみられる檳榔利用文化の類似性は、両民族間における文化交流、すなわち文化の相互的な「乗り入れ」が継続的かつ頻繁に行われてきた結果として理解することができる。つまりこの類似性は、両民族が類似した自然環境に居住することによってそれぞれ独立して形成された収斂的結果というよりも、両民族間の直接的な接触と交流を通じて形成された必然的な帰結であると考えられる、ということである。

このように考えられる背景には両民族間で頻繁に行われてきたとされている通婚が関係している。『台湾原住民研究への招待』において笠原は、パイワン族とルカイ族の間では、とりわけ首長層同士の間で通婚が顕著であると指摘している。このような両民族間での通婚は、両民族の関係者が出席する結婚式が生じることを意味する。両民族の関係者が出席するこのような結婚式では、どちらの民族の習慣も取り入れられ、パイワン族とルカイ族の文化交流が生じやすいことが予想される。その結果、結婚・縁談における檳榔の利用方法についても、両民族間で類似性が強まった可能性があると考えられる。

パイワン族とルカイ族の間での通婚は、結婚・縁談での檳榔利用にとどまらず、他の分類、特に伝統儀式における利用においても影響を与えていると考えることができる。パイワン族の祖霊祭や収穫祭、ルカイ族の収穫祭など、檳榔が用いられる各種儀式においては、いずれも首長が重要な役割を担っている。通婚によって異なる民族の集落へ移動した首長層は、これらの儀式運営に関与することで、両民族の儀式の様式や文化を媒介する存在となり得る。その結果、儀式における檳榔の用法や象徴性が相互に影響を受け、類似した形態をとるようになったと推察される。

このような考えから、仮説として、私はパイワン族とルカイ族の間での檳榔の利用文化の類似性は、通婚を基盤とした継続的な相互の文化交流によって生じたものであり、偶発的ではなく両民族の関係の中で必然的に生じたものであると考えている。仮説ではあるが、身分差なく利用されている物質に関する文化においても、集落におけるリーダー的存在である首長がその文化形成に大きく関わっていると考えることができるという結果になった。

また、このような主に首長層の通婚を通じた文化の類似化は、檳榔の利用文化のみにとどまらず、パイワン族とルカイ族の他の文化における類似化の要因としても仮説を立てることができると考えている。2章でも述べたように両民族の間では幅広い分野での文化の類似性が確認されており、その多

くは首長層に関連した文化である。通婚は首長層で多く見られることからこれらにおいても同様に通婚が起因し、類似性が生じたと考えることができるのである。

VI.おわりに

本研究ではパイワン族とルカイ族の文化における類似性を、両民族間で広く用いられている檳榔という物質に着目し、物質文化の視点から明らかにすることを目的とした。文献調査のほか、パイワン族とルカイ族の集落を中心に現地調査をすることもでき、これらの調査を通して、両民族間で檳榔が縁談、伝統的儀式、祝辞の際の贈答品などとして、単なる嗜好品の域を超えたさまざまな場面で用いられていることが確認できた。また、これらの調査結果から両民族間での檳榔の利用文化に関する共通性を見出すことができた。さらにその共通性は偶発的なものではなく、首長層を中心とした、通婚による両民族間での文化交流による結果であるという考察を導き出すことができ、その檳榔の利用文化の類似性に関する考察から、パイワン族とルカイ族のその他文化・社会も、両民族間での通婚を通して類似性が生じたのではないかという、より広範囲の事象に対する仮説に還元することができた。

しかしその一方で、今後の課題も多く残る結果となった。まず挙げられるのが、よりマクロな視点、両民族内の各グループ間および各集落間での比較が行えなかったことである。特にパイワン族は、北部に居住するラヴァル系統の集落と南部に居住するブツル系統で祖霊祭実施の有無など文化の差異が先行研究より確認されている。今後両民族間での比較研究を継続する際は、両民族間での比較はもちろんのこと、このような各民族間での主要グループ間や集落間での比較研究も行う必要がある。

考察においても、根拠になり得るほどのデータを収集することができず、仮説にとどまってしまった。今後の研究ではより多量のデータを収集することに努め、根拠がしっかりとした考察を行えるようにしたい。

また、現地調査期間や聞き取り調査時の質問の方法などが原因で得られた調査結果が限られてしまった、または聞き取り内容が恣意的になってしまったことが否めないことも今後の課題である。今後はより余裕を持った期間で調査を行い、より多様な年齢層、属性の人に対する幅広いインタビューを実施し、質問方法も誘導がないような方法に努めることで改善していきたい。

謝辞

台湾の原住民に関して興味があるという私の思いに対し、自主研究奨励事業への参加を提案してくださり、発案から報告書の執筆に至るまでに適宜アドバイスをくださり、懇切丁寧に指導して下さった指導教員の佐藤廉也先生に、心より感謝申し上げます。

また、現地調査の際に、調査を快く受け入れてくださり、日常生活や文化実践についてさまざまなお話を聞かせてくださった、屏東県来義郷原住民文物館および魯凱文物館の学芸員の皆様をはじめとした、屏東県来義郷のパイワン族および同県霧台郷のルカイ族の住民の皆様へ、厚く御礼申し上げます。

注釈

1:本研究では台湾における先住民族であるオーストロネシア語族に分類される諸民族の人々を原住民または原住民族と表記するが、これは差別的な表現ではなく、台湾における正式な先住民族を指す言葉である。「原住民」という用語は1983年から本格化した原住民族の権利獲得運動の進展の中で用いられ始めた。

2:屏東県来義郷原住民文物館で得られた証言を元にした記述である。

3:パイワン族とルカイ族はどちらも主に台湾南部の太武山周辺に居住するオーストロネシア語族の台

湾の先住民族で、パイワン族はプユマ語群に属するパイワン語を、ルカイ族はツォウ・ルカイ語群に属するルカイ語を話す。人口は2023年時点でパイワン族がおよそ8万5000人、ルカイ族がおよそ1万1500人であるとされている。

4:日本統治時代、台湾総督府の見解におけるパイワン族とルカイ族の民族分類は、伊能嘉矩らのパイワン族とツァリセン族(現在のルカイ族と北部のパイワン族を指すと考えられる)という分類が、一度、森丑之助らによってパイワン族に単一に分類され、その後馬淵東一らによって現在の分類に変更されている。

5:『台湾原住民研究概覧』のパイワン族の項目によると、パイワン族の性差によらない首長の世襲制度は世界的にも珍しい事例であるとされている。

6:『台湾原住民研究への招待』より、パイワン族は北部(隘寮溪以北)のラヴァル系統と南部のブツル系統の2つの系統に分類できるとされているが、このうちラヴァル系統の集落では祖霊祭を歴史的にも実施していない。

7:聞き取り調査で得られたデータであり、正確な内容は不明であるが、政府機関の実施している各種の檳榔を食べないことに対するキャンペーンやがん予防に関するキャンペーンのことを指していると思われる。具体例として1997年から毎年12月3日に制定されている「檳榔予防デー」などが挙げられる。

参考文献

台北帝国大学土俗・人類学研究室編 1935. 台湾高砂族系統所属の研究. 刀江書院.

台湾総督府蕃族調査会編 1922. 蕃族慣習調査報告書. 台湾総督府蕃族調査会.

日本順益台湾原住民研究会編 2005. 台湾原住民研究概論. 風響社.

日本順益台湾原住民研究会編 2014. 台湾原住民研究の射程—接合される過去と現在—. 風響社.

日本順益台湾原住民研究会編 1998. 台湾原住民研究への招待. 風響社.

臨時台湾旧慣調査会編 1914. 蕃族調査報告書. 臨時台湾旧慣調査会第一部.

笠原 政治 1997. 幻の<ツァリセン族>—台湾原住民ルカイ研究史(その1)—. 台湾原住民研究(2):21-60.

笠原 政治 1999. <ルカイ族>の誕生以後—台湾原住民ルカイ研究史(その2)—. 台湾原住民研究(4):98-119.

紙村 徹 1996. 台湾パイワン族,ルカイ族における首長家のレガリア—神器伝承の意味論—. 天理参考館報 (9):93-141.

角南 聡一郎 2009. 台湾原住民嗜好品関係物質文化の基礎的研究. 財団法人タバコ総合研究センター助成研究報告 09:1-24.

松澤 員子 1976. 東部パイワン族の家族と親族——ta-djaran (1つの路)の概念を中心として. 国立民族学博物館研究報告 01(3):505-536.

山元 宗立 2017. 台湾およびマイクロネシアにおける檳榔利用 —過去と現在を比較して—. 財団法人タバコ総合研究センター助成研究報告 18(2):133-153.

尤 驍 2023. 今日の結婚式からみるルカイ頭目の役割と権威. 台湾原住民研究 (27):3-42.

林 麗英 2010. 台湾原住民族の宗教儀礼に使われてきたアワ酒とビンロウの地方文化産業化過程の比較研究. 嗜好品文化研究会.

衛生福利部編 2015. 戒檳榔 蓋健康 三大産業全力推動檳榔防制. URL: <https://www.mohw.gov.tw/cp-3207-21412-1.html>. 最終アクセス日:2025年12月15日

国立公文書館 アジア歴史資料センター編. 台湾原住民族～日本の調査にみるその文化～. URL: <https://www.jacar.go.jp/seikatsu-bunka/p07.html>. 最終アクセス日:2025年12月14日

台湾駐日経済文化代表処編 2023. 台湾の原住民族文化. URL: https://www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/202.html. 最終アクセス日:2025年12月14日

内閣府 食品安全委員会編 2006. 台湾行政院衛生署、ビンロウジの発がん性につき注意喚起. URL: <https://www.fsc.go.jp/fsciis/foodSafetyMaterial/show/syu01370700361>. 最終アクセス日:2025年12月14日

屏東縣政府希望城市編 2014. 認識屏東 人文與節慶(日本語版および中国語版). URL:<https://www.pthg.gov.tw/cp.aspx?n=3CFD97064180A136>. 最終アクセス日:2025年12月14日

楊 政賢 2021. 原住民族委員會 原住民文献. 打開綠色的文化膠囊 | | 臺灣原住民族—檳榔—的多重品味.
URL:
<https://web.archive.org/web/20220215103630/https://ihc.cip.gov.tw/EJournal/EJournalCat/563>. 最終アクセス日:2025年12月14日